

高齢社会の福祉専門紙

シルバー 新報

年間購読料22,050円(税込み)

平成18年/2006年

CONTENTS 3月24日
(金曜日)

山谷でホスピス始めました—7

末期がんになってもパチンコ屋へ。むせないように慣れた路上の上で食事介助——。帰る場所のない高齢者と生活保護者の街・山谷でホスピスを始めた人がいる。死に場所ではなく、暮らしの場としての在宅ホスピスは、誰もが肩の力を抜いて自然体で生きられる場所だ。



介護保険料3割増で4312円に—2

新介護報酬で厚労省がQ&A—3

介護福祉士養成ルート一元化に異論—4

著者を訪ねて 山本 雅基さん

末期ガンで点滴を付けていてもパチンコ屋に行けるホスピスがドヤの街山谷(さんや)にある。開設から三年間の歩みをまとめたのが「山谷でホスピス始めました」(実業之日本社刊)だ。著者は施設長の山本雅基さん。死に場所としてではなく、暮らしの場としての在宅ホスピスが当初からの目標だったが、下手な理想は木っ端微塵だ。一癖ある老人たちとのすったもんだの中で、今の自然体の境地を学んでいったという。(川名佐貴子)



「三年は想像を絶するほどの連続でそれどころではなかった。ようやく振り返る余裕ができました。素人

役立つ生き方を探して迷い、時にうつ病に悩み、やがてホスピスに邁進する。新婚旅行も山谷。一九六三年生まれ。パプルの頃に青春を過ごした同年代の者としては、弱くて、純な山本さんの生き方が驚きだ。しかし、当然、美談だけでは終わらない。個性を尊重する。と見計らったように息を引き取るのだという。「最初が、その人なのがわかってきて自然なものになっていった」といふ。大森俊夫さん(六三)には徹底的に振り回されたという。その彼の遺言は「無縁になること」。そこに山本さんは「潔さ」を読み取っている。だから続けられるのだと思う。不思議なことに一人が好きなのは一人のときに、眠る場所になってしまふ。そこに行ったらお終いと噂される場所になってしまふ。そうではなくて、コミカルケアにしていたのが、それがわかってしまふところだから俺も入ると怒鳴り込んでくる人もいますから(笑)」。山本さん) 全人的(ホリスティック)ケア、スピリチュアル(霊的)ケアなど難しい言葉や理屈を極力避けたのは元編集者で公私に渡るよきパートナーの美恵さんのアドバースという。人生の立ち位置によって十人十色の思いを喚起しような魅力のある仕上がりだ。

「山谷でホスピス 始めました」

「きぼうのいえ」の無謀な試み

外国人向けのきれいな「ポーな試み」だ。安ホテルに建て替える宿泊。まず家を構える。最初も増えてきているとはいへ、退路はなし。しかも、え、ドヤ街が独特の空気を、借金は一億円。宣伝に「お漂わせる場所であること」は、風呂に入りませんか」と盛変わりない。かつての日雇い労働者の街は、帰る場所がない高齢者と生活保護の街に。高齢化率が四〇〇を超える地域もある。ここでホスピスを始める。タイト

「面白いから本にしてみるにもあるが、確かに「ムな、と前から声をかけて

「捨て犬を拾っては怒られた」という。心やさしい少年は、社会に



山本夫妻



礼拝堂にお位牌。ちゃんぼんでいい

末期ガンでもパチンコ

普通の暮らしの延長で看取りを

(実業之日本社) 03・3562・11021
一六八〇円